

J・コーニング・コステ (著), 阿保順子 (監訳)

アルツハイマーのための新しいケア—語られなかった言葉を探して

大橋正洋 (神奈川リハビリテーション病院)

アルツハイマー病 Alzheimer Disease は原因不明の、破壊的・非可逆的に進行する大脳の疾患である。高齢者に多く、発症率は 90 歳まで指数関数的に増加する。このため高齢人口が多くなった先進国社会を悩ませる事象の一つになっている。疾患は徐々に進行し、患者から次第に記憶、見当識、注意、空間認知、遂行機能などの認知機能を奪っていく。ついには感覚や運動機能が廃絶した失外套症状態のまま寝たきりとなる。発病の初期には記憶が失われ、患者はアイデンティティを失う恐怖に怯える。さらに進行すると、被害妄想などの精神症状や暴言・暴力、徘徊、不潔行動などの問題行動が起きることがあり、これらは介護者への多大な身体的、精神的負担になる。わが国でも団塊世代の高齢化があって、脳血管性認知症の増加とともに、アルツハイマー病は保健・医療・福祉の大きな課題になっている。

アルツハイマー病と診断され、ある程度病気が進行すると、その人は破壊され、存在しなくなった人のように扱われることがある。本書のメッセージは、認知症患者と意思疎通を図ることに工夫をすれば、患者と介護者双方の QOL を、より長く良好に保つことができるというものである。本書の原題は、*Learning to speak Alzheimer's* である。患者は言葉を用いたコミュニケーション能力を失っていく。著者は読者に対し、言葉に代わる方法で患者と意思疎通を図ることを学習しましょうと呼びかけている。たとえば、介護者は、自分が所属している通常の現実に合わせて患者を論じたり、事の善し悪しを説明しようとしがちである。そうではなくて、患者が感じている現実を共感して、その流れのなかで対処することを勧めている。これによって、患者も介護者も満

足を覚え、さらに介護することが喜びにもなると述べている。このような考え方で患者に接する方法を、著者はハビリテーション *habilitation* という言葉で説明する。ハビリテーションとは、通常は障害児の療育を指す用語である。しかし、ここではアルツハイマー病患者のために著者が展開してきた革新的ケア手法の理念を説明する用語として用いている。ハビリテーションの内容は、5つのカギ(原則)で示されていて、読者の理解を助けている。本書は、特に病態が初期の患者とその家族に対して、具体的な考え方と対処法を示している。

著者は、まだアルツハイマー病患者への理解が不十分であった 30 年前から、先駆的なケア手法を世に問うてきた。出発点は、著者夫婦に 4 番目の息子が誕生してまもなく、夫が若年性のアルツハイマー病と診断され、子育てと進行性に機能が失われていく夫の介護を並行してやり遂げた経験に基づいている。著者が示した考え方は、全米の多くの患者と家族の指針となり、広い支持を得ることになった。本書には、ハビリテーションの 5つのカギについてだけでなく、食事や入浴、徘徊への対処、食べ物の準備など日常生活における具体的なケア手法も紹介されている。

米国における 30 年間の実践的な経験に裏打ちされたケアの手法が、高齢社会を迎えたわが国で日本語に翻訳されて紹介されるのは、とても有り難いことと思われる。訳者は、米国の事情と認知症のケアに精通していると思われ、訳文はこなれていて読みやすい。

(四六判 320 頁 税込価格 2,520 円 2007 誠信書房)